スペシャルインタビュー

〈中島らも〉

NAKAJIMA RAMO

取材／文　杉本ひなた
撮影　中島隆之
取材協力　中島らも事務所

卑怯だから、逃げ場があるみたいでしょ。
コピーライターの看板あげて。

「オモロなかったら黙りこくる」と脅かされていた。話題作『今夜すべてのバーで』は、「作られすぎ」の悪評が出るほど評判が良く、本年度の第13回吉川英治文学新人賞に輝いた。その後も、『人体模型の夜』、『愛をひっかけるための釘』と次々と文筆をふるい、「いずれは直木賞」との声も高い。中島らもの肩書は、小説が多様な仕事の核を占める作家に変わった。

先頃、『新伍NIタッチ』でのコピーライター廃業についての宣言には、

「ええ、きっぱりやめました。看板をあげてるだけで、まったく仕事というものがこない。代理店に行って、ヨイショのひとつも言わないといけませんから……」と、コメントする。

「末期的にはオモシロいことあったけどね。電話かかってきましてね、『コピー依頼したい』っていった。これは、半年ぶりじゃないかなって。で『阪急西宮駅の前をこうこうこう行ったところに、細〜い階段があるからね、そこ上ってください。そこが事務所です』とか言われて。あっそう、こ、これはオモシロそーやな、行ってみよって。」そこは建築設計事務所で、若い社長が出てきたそうだ。会社案内を作りたいらしく、それも「わしらよう書かんから、コピーライターに書いてもらわんとあかんのやけど。わしらはね、あんたの名前しか知らんっ、コピーライターという商売については。そいで、電話して来てもろたんやけど」という内容のものだった。

「必死で説得しましてね(笑)、やめた

ほうがいいですよって。」

なぜかというと、こうである。

「引き受けたら邪魔くさいでしょ、会社案内って、昔はよく作ったんです。すごーい手間なんですよね。文句おおいでしょ（小声）。予算が30万位しかないらしくって、作るのにね（笑）。」

関西広告業界の実態は、えてしてこんなものといえる。業界誌『宣伝会議』のコピーライター養成講座を受講し、今では教鞭をとる彼は、この職業が「どんだけ格好悪いかしゃべる」そうだ。「コピーもへちゃちゃもない」と。彼の言う「毛並みのいい」講師陣の授業で、すっかりその気の生徒にである。

「それでやめるぐらいやったら、今のうちにやめたほうがいい」と言う。

その反面、近年、コピーライターが独特のキャラクターでビジュアル・デビューを果たすことは珍しくない。関西でその走りとなったのが、ほかでもない、彼ではないだろうか。彼を初めて見たのが5年程前の深夜番組。大友康平と北野まことの3人で、道頓堀界隈を潜入ルポするものであった。

「おかしかったのが、天龍書店かな。入ったら、まことの本が古本屋に出てたりして（笑）、自分で買い取って。」

――売値が安いと、みなさんで寄ってたかってチェックしてましたね。

「テレビ出てないけど、ぼくも探しましたよ、店中（笑）今度『なにわのアホぢから』ってのが出ますからね。それはもっ、すぐ出ますよ（古本屋に）。」

どんな本か訊くと、横の書棚からそれを取り出し、「6、7年前に企画本で作って、でっちあげた本」だという。「うちのまわりの貧しい人々をみんな集めて、2週間位で作った」そうだ。「そいで、最初、企画書がわりとスゴいなと。『なにがなんでも大阪がエラいんや』っていうタイトルだったんですよ。こんなアホなことできないからね、替えていいんだったらやりますって。むしゃくちゃしてしまった。」

――本の中で、なにわのアホを語るのは最後にしたいとありましたが。

「ええ、『西方冗土』っていう本を出して、それでもう、やめよっと。キリないんですよね。……て言ってたら、復刻版が出てしまった（笑）」

と見解を述べる。そして、

「なんか置いとくとね、本棚がケガレるようなんってあるじゃないですか。せっかく難しい本とか自分の思想の流れにそって、美的感覚にそってね、**本棚って、自分の人格みたいなもんでしょ。**

そこにコレがふっと置いてあると、どうしても違和感が……あるでしょうね」と、自分を言葉で飾るのではなく、言葉でケナす、いつもの調子で語る。

彼が主催する笑殺軍団『リリパットアーミー』も劇場放送されだした。年4回公演のうち脚本を2本書き、迫真の演技を見せる役者『中島らも』の姿がそこにある。が、もとより彼はテレ屋のはずだ。それについては、「足ひっぱってしまうでしょ、自分だけテレてると。だからどこかで……」

ブチッと切れてしまう。と、人格かわってしまうんです。

と弁明する。

初挑戦した小説『今夜すべてのバーで』の主人公は、アルコール性肝炎の患者であり、描写がかなり鋭い。読後、誰もが推測するとおり、私小説に近いもので、丸5年前、事務所を起こしてすぐ入院した出来事が起因する。

「カッコイイお医者さんとかベッピンとか、ストーリー立ては嘘ですけど、患者さんとか病状であるとかは全部リアルです。相部屋だから周囲の状況ってチェックしますよね。病院ってとこはおかしいから、日記つけとこ思ってね。道を歩いてると、一見、まあなんとか健康な人しか歩いてないですから。病院に行くと病人ばっかりですからね、じゃんじゃん死にましたね……。」

そのとき、「後で小説にしようとは、努々思わなかった」そうだ。なぜなら、「尋常な飲み方じゃなかったしね。睡眠薬あそびとかと併用してたしね（笑）、こりゃ死ぬぞって感じ」であったと。その後も、ふつうに飲んでいるという。

「ぼくは独り酒ですね、自分の仕事部屋で。マスターとかね、そういうのと話すのはうっとおしい（笑）。」

珍しくストレートに本音を吐く。が、すぐに、決まった時間に決まった席でコーヒーを飲むという、売れない漫画家の話を持ち出した。それは「喫茶店のマスターが話しかけるのは困る。喫茶店に行くというのは、最低限の社会とのつながりで、これがないとコワい。ただそこで話しかけられると、人格をさらさねばならないから、それがいやなんだ」という話だった。そっとしておきたい、そんな気持ちに襲われる。

ところで、中島らもの楽器好きは周知のことだ。自給自足で楽器を作ってしまうぐらいで、事務所に持ち込んだ楽器を指して、「いろいろあるでしょ、民族楽器とか」と、本当にいい顔をする（余談だが、楽器の背後にモノ黒のドでかい顔パネルがあった。ジョージ川口である）。インドのサーモニウムをはじめ一通り説明してから、彼の咄（はなし）がはじまった。

「たとえば胡弓（こきゅう）、これって自分でできるじゃないですか、よく考えれば。ひじょうに簡単なもんでしょ、作りとしては。問題は胴なんですけど、これっておけの技術からきてると思うんですよね。マンドリンやバイオリンなんかでもそうだと思いますけど、ものすごい技術がいるでしょ。だからこれは作れないと。ただ、胴になるようなものを有り物で発見できればね、それで作れるだろうっという。」

「それでね、ずーっとそういう目で物を見てるからね、丸くて空洞状態のものを見ると、いいなーっと思ってしまうんですよ（笑）。あのね、花博の前くらいに、大阪中にごみ箱が設置されたでしょ。ご存じかな、灰色のまるーくなった、あれのフタなんですね。あのフタをボディーにしてネックをつければ、絶対よくなるはずなんですよっ、どー見ても。」

「……夜中、盗みに行ったんです。でね、ばこんって取れるもんやと思ったんですよね。なんか常着してあって、ものすごい頑丈に付けてあるんですよ。

東西文化比較とか、笑いの違いとかね。「口にタコができたみたいや」。

で、底にはコンクリートの落としがついてるんですわ。仕方ないから、そのまんま……。解体したところでヘトヘトなって、まだ作ってないですけどね。どうなるかなー、時効になるかな。窃盗罪ですよね……

嘘ですよ、今の話はね。

ということにして……。」

とりあえず、「ときどきムクムクと音をもたげる虚言癖」が性分の、なまの中島らもに出会えた瞬間であった。

そして、楽器収集は鑑賞用ではなく、音を鳴らしてなんぼのものという。アフリカで入手した、マサイ族の楽器もそのひとつである。

「木の胴で、牛の革が張ってあるわけです。太鼓なんですね、ちっちゃーい。そっから牛の角が出ていて、角から糸が張ってあるわけですよ、4弦かな。ボロローンっと弾く楽器なんですけどね、かわいい音するんです（らも氏直筆ラフ画参照）。で、渡辺香津美さんとかと一緒にやったことあるんですよ、『夢の乱入者』。使おうかと思ってテレビ局で動かしてたら、中から奇妙なものがいっぱい出てくるんですよ。何だかよくわからないんですけど、わらわらっとした、もやもやっとしたね。

『たもと糞』ってあるでしょ。

ポケットのほこりとか。ああいうのの動物と虫と植物と木くずとか集まったような、もう『これがアフリカだ！』いうようなゴミが、中からぼろぼろぼろぼろっと出てきて……。」

余程のいとおしさをここまで遠回しに語るのは、彼の手順であり、味だ。

また、京都での思い出を訊くと、彼がフーテンしていた頃によく行ったという、20年近く前の百万遍周辺が浮き彫りにされた。フラワートラベリンバンドや村八分がいたそうで、バンド同士が仲悪く、分裂してスリルあったと。黒人のハーフで村八分のギタリストが、カッコイイと話す。

「ある日歩いてると、ケースに入ってない裸のギターを抱えて、市電の道をとぼとぼ歩いてたりするわけですよね。要するに、電車賃がないから、稽古場までそうやって歩いて行ってる。」そういう人がゴロゴロいたそうだ。

「それから、よくお寺で寝かしてもらいました。『念仏根本道場』ていうとこですけどね。そこへ行くと本殿かなんかの雨戸が閉めてあって、廊下にフーテンがずらーっ寝てるんですよ。で、空いてるとこ探して寝るわけです。朝になるとがらがらっと雨戸が開いて、奥さんが『朝どすえ』とか言って順番に起こしてくれるわけですよ。」

―一宿一飯の何かを返すとか。

「いやっ、目をこすりながら出て行く感じですけどね。気風でしょうね、京都って。学生とか若い人には優しいでしょ。なんか大事にするみたいな感じがあるような気がしましたけども。大阪だったら、そんなんしてたらオッコかけられますけどね。」果して今の京都もそうなのか。学生も変貌しただろうし、意外に思えた。

それから4、5年前、中畑貴志に連れて行かれた店を「何がなにかわかんないですけど、高いのか安いのかわからない、一見では入れないような店」と証言する。これは祇園のことである。

「その後あの人は、『王将のギョウザがどうしても食いたい』て言い出して。で、ギョウザ食べて帰ろうとしたら、ぼくが床にこぼれてたタレで滑って、肘をザクッと切ったんですね。血まみれになってたら、中畑さんが胸ポケットからハンカチ出して、『ふけよ』って。ぼく、むしゃくしゃ（けつ）アオくてね……完璧にね、

一等賞の人とちんぴらとの差を、そこで作っちゃった

という。」

……落ちであった。

場所は中島らも事務所。入口から死角になった、トの字型の出っぱりが彼の領域らしく、どんつきにデスクがある。足元に広がるリビングマットには、小ぶりの座布団がちょこんと用意され、ちゃぶ台（のような）を狭んで、眉つばものの咄は続いた。残念ながら「黙りこくる」状態にならなかったが、観察に夢中になると喋らなくなる彼である。気遣ってくれたのだという思いがもたげてくる。「われ関せず」とカプセルに入った状態、その中身はあめ粒つぶ。中島らもに会ってそう感じた。

日常でもおぼんとか、寿司おけとかね、ああいうのを見るとドキドキする感じ。

PROFILE

1952．4．3生まれ、A型
本名：中島祐之（なかじまゆうし）
出身地：兵庫県尼崎市

1976年　大阪芸術大学放送学科を卒業。㈱大津屋入社。
1979年　コピーライター講座「宣伝会議」を受講しはじめる。
1980年　㈱大津屋退社。
1982年　㈱日広エージェンシー入社。
1985年　『頭の中がカユいんだ』を大阪書籍より処女出版。
1986年　笑殺軍団リリパット・アーミーを主宰。脚本を書き、自らも出演。
1987年　㈱日広エージェンシー退社。㈲中島らも事務所を設立。
〈主な近著〉
1991年3月　初の小説『今夜すべてのバーで』を講談社より出版。第13回（平成4年）吉川英治文学新人賞を受賞する。
7月　『西方冗土』を飛鳥新社より出版。
9月　『明るい悩み相談室4』を朝日新聞社より出版。
11月　『人体模型の夜』を集英社より、『らも吐』を角川出版社より出版。
1992年5月　『愛をひっかけるための釘』を淡交社より出版。
6月　編著『なにわのアホちから』が講談社より復刊。